

〈研究ノート〉

世界遺産「海印寺国宝大藏経、大藏経木殿」と言霊

原 雅子¹

要旨

高麗の大藏経版木とそれを収蔵する木殿の工夫と八万枚版木は主に白樺が使用され普遍である。人智の営みが歴史を形成し沈黙する版木は唯の木板ではないことを教示してくれる。韓国の仏教は観光仏教に墮す、あるいは葬儀を営むだけの仏教ではなく、心を説き修行している。我国のゆくえを思考する。沈思し深いものに目をやることを学んだ。版木から書物へ、さらに世界中がITの先駆けから情報機器をもって電子書籍(E-books)化を事業とする方向にある。タッチパネルで画面がくるくる移動し情報を得られる速度に驚嘆する。写本から版木、グーテンベルグ印刷機の紙の書籍から電子書籍のデジタル化の方向へ進むことは間違いないことである。しかし、¹も人間の開発物であるから人間の頭脳が先んじている。

わたくしは逡巡し考えることを言霊なる言葉とともに持ち続けたい。八万枚の版木は黙してそう沈思しているかのごとくである。

キーワード 版木八万枚、高麗高宗、情報機器、言霊^{ことだま}

一

書物を筆で認める「写本」の一冊一冊から、印刷という大部への冊数を可能にした「木版」が存する。中国では梓の木が多用され、出版を意味する「上梓」の由来となる。我国では桜、黄楊も使用される。高麗大藏経版木は主に白樺といわれ書物出版を支えた版木は「板木」とも書かれ、頁一丁分、板状の木に字が彫られる。彫師の彫った板に墨が塗られる。紙を置き書き取り、一枚ずつ刷り上げ基とする。三椏、楮などの繊維をほぐし漉いた伝統的漉き紙は時代に耐え得る強靱なものである。

日本では江戸時代、「文房四宝」という言葉が流行し、四宝の筆・紙・墨・硯を文人たちが好み和本、唐本、高麗本などから学問や宗教等のために書籍が刷られ、舶載本として船に載せて運ばれた辞書や様々な本が輸入されて、日本の学問や宗教に資してきた。

版木にちなむ話を進めるゆえ、古代日本の僅かな資料から当時の版木彫

師の生活を垣間見よう。版木の彫師が一字間違えると給料が引かれるという厳しい現状に彫理めの失敗なきように努力するのである。時間も今のサラリーマン並に定められ、急遽家に仏事の行事などが入ると休暇を取らざるを得ないことなども出てくる。其の分また給与から賃金が引かれる資料が奈良時代の聖武天皇、光明皇后時代の資料として現存する(「正倉院古文書」、『正倉院展』二〇〇九年、奈良国立博物館)。主に仏教経典や学問の版木に携わった多数の人々の生活とうごめく資料は僅少とはいえず、国家事業の蔭に倅しくも逞しい支えとなった人々の営為を垣間見させてくれる。日本の資料が朝鮮の後章以下に掲げる版木に携わった人々の思いをいたす資料になるか否かは国状が異なるので別である。爰でなにがしかの推察資料として生活の糧としつつ、普遍的な国家事業を支え人々の儉しい生活のエピソードの一端は共通するものが有りはしないか。朝鮮版木の研究には及んでおらず不明な点は山積している。

1 Masako HARA

千里金蘭大学 生活科学部 児童学科

受理日 二〇一〇年九月一日

表題の、韓国の木版大藏經八万枚（八万大藏經）という大部の珍藏は高麗の高宗の時代に作製されたものである。韓国で国宝に指定され、さらには世界遺産の指定を受けたのは一九九五年のことである。仏教の經典、大藏經の版木である。一二五一年に版木八万枚が完成、高麗本大藏經は海印寺に収蔵される。折りしも我国の建長三年、後深草天皇の御世、源氏と北條の拮抗時である。禅宗が導入され鎌倉に建長寺の伽藍等、京都の地に禅寺が建立され、修行に平行し仏典經典も必要な時期に当る。丁度、時を同じくして、隣国高麗では世界遺産の大事業を完成させていた。ちなみに世界遺産は一九七二年にユネスコ総会で採択、二〇〇三年八月に一七九締結国により承認される。

いわゆる「世界遺産」とは、普遍的な価値を文化遺産、自然遺産、複合遺産に分類し世界共通財産として保護承認する趣旨のものであり、「世界の文化遺産および自然の保護に関する条約」を正式の名称としている。

我国では大藏經が官版の初めとして江戸初期に天海版として出版され、比叡山文庫に収蔵された。この大藏經も中国の数多の学僧、学者などが往來し、仏教が高麗、日本へと辛酸を経てもたらされ、歴史的に普及を図り守護され、国の精神支柱として用いられた証しである。

大韓民国慶尚南道陝川郡にある海印寺を車で訪問した。慶州市江東面良洞里より車で三時間、最南東部に位置し伽耶山の中腹に位置する。新羅時代僧義湘の八〇二年の創建の梵刹で、元は華嚴宗の寺で現在は禅宗の曹溪宗である。墨絵のごとく霞む山々全体が寺領とのことであり、清浄な空気が満ち満ちている。新羅時代の塔が自然にしっかりと建立のままの姿を留め時代を感じさせる。韓国三大禅宗叢林の一である。伽藍の瓦屋根が実にのびやかな美しい線を描き山中に点在している。

安居（あんご）の中でも、禅宗にのみ残る冬安居は陰曆一〇月一六日から翌年正月一五日まで実施されるが、韓国の寺では陽曆三月三日に冬安居が終了する。そして、翌日四日は冬安居自恣の日、一般信者にとつては一年で一番大きな満月の日とあつて殆どの人々が祈祷のために登山してくる

という。受入れの海印寺では多忙な日になるとのことである。

海印寺を訪問したのは多忙を控えた前日である。それにも関わらず、建物の外に出て待つて下さっていた僧たちの姿が遠くに見えた。海印寺大学学長の孟東燮（めんどんぷす）先生の姿があった。麻の薄灰空色の丈の長い爽やかな僧衣に身を包まれた先生であり、ゆつたりと自然體で暖かく出迎えて下さった。

韓国諸寺巡礼の旅の主目的は海印寺訪問である。韓国国宝の八万大藏經にめぐり逢いたい旅であった。海印寺大藏經は世界文化遺産に一九九五年に登録された八万枚の版木、印字經典、および建築物を指す。大藏經は仏教の經典を総集し最高のものでされる。現在所蔵の木版は再刻のもので、初刻のものは火災で焼失したという。その一部が現在、京都南禅寺に保有され、最近日韓の研究者で調査が行われたところだ。印刷された高麗大藏經は日本にも室町時代、大部に輸出され馴染みの深いものといえる。特に、現存する禅宗最古の史書『祖堂集』は海印寺で発見され、禅学史研究に大きな刺激を与えた。

わたくしは我国において学生の引率で比叡山の叡山文庫で大藏經などの版木と版木を使って刷られる印刷物を二〇〇二年に見たことがあり、韓国の世界文化遺産に登録された版木はこのほか興味があり、韓国の国宝を見得る特別視察に雀躍の思いであった。

韓国において、海印寺の大藏經版木と収納する大藏經木殿は世界遺産に登録されていると同時に国宝として国の保護を受けているとの、海印寺大学学長の孟東燮先生の説明がある。孟東燮先生は花園大学に留学され、元花園大学長西村恵信先生の教え子で、同大学より博士第二号を取得され、現在海印寺大学学長として海印寺の僧伽大学で沙弥僧たちの育成に勤しんでおられる四十代の学僧である。折しも卒業式は午前中に終了し、ひと月の休暇が修行僧たちに与えられるとのことである。海印寺は今後、大学院設立を目指しているとのことであった。海印寺に僧侶は五〇〇人いてそれぞれの役割を果たし、あるいは引退された腰の屈まった老僧たちが別部屋にて余生を静かに送られているという光景も見られた。

なにはともあれ、我国が自国の文化歴史の育成保護の費用を削減し、切り捨てて行く方向に対し、韓国では政府が歴史遺産、文化遺産に対して熱意をもって保護しようとしている姿勢が国全体に漲っているように感じられる。歴史文化の長期の育成と補助が結局、その国の存続を決定することになるといふ持論は、益々わたくしの中で遅疑逡巡してはならないという思いにかられる。

この寺中の一角に木殿は存する。単層寄棟造で一四四八年の建立とのことである。間口六〇・四四、奥行八・七三米。修多羅藏と法宝殿の二棟の建物から構成されている。鍵は鉄で二重に頑丈に附けられている。

話を版木に戻そう。大藏経木殿はしつかと一人の老僧が二〇年も管理し、国宝ゆえ一般に人を中へ入れない。わたくしは特別拝観の許可願いによる特別視察で入庫し得た。感激の一瞬は至福の時であった。心を引締めつつと触れないように注意しながら歩く。版木がしつかと木殿の棚に版木一つずつ縦に立てて並べられ圧巻である。その背の部分の下部には千字文に依る分類と図書番号の紙が附され図書館の本のごとくである。ちなみに我国の叡山文庫では版木が和本の置き方と同様、横に寝かせた上に順次、他の版木を横の状態に積み重ねていく方法であった。習字の手本の「千字文」の順番がとられている。彫られた字体は美しいしつかりした漢字が並び、鋭角のはねる部分や力の込められる部分の力強いものである。書体は初唐の書家歐陽詢の体で一貫しているといわれる。美しく凛とした字であると同時に誤刻や脱字がなく世界の大藏経の中でも完璧な藏経をなし、優れた手本として高い評価の基に世界文化遺産に登録されたのである。

初彫本は一二三二年（高宗一九）、蒙古軍の侵入により焼尽したとのことであった。そして高宗二三年から一五年間かけて再び開版され一二五一年都のあった江華島で完成し、一三九八年に版木は海印寺に移された。日本の元寇（一二七一年、一二八一年）の三九年前、高麗が襲来され被害を蒙り文化遺産が破壊されたのであった。火による文化遺産の焼失が一番気に懸かることであるが、人為的に文化財が破壊の目に遇う不幸も痛恨の極みである。

床は三〇糎ほど空間が取られ配架されている。床は木炭、石灰、塩を重ねて盛り上げて版木の湿気を防衛する方策が取られているとのこと、わたくしが訪れた日は棚の床部に塩が白く滲んでいた。多湿時には湿気を吸収し、乾燥時には湿気を放出し、一定の湿度を保つよう工夫考案されていた。そして、周辺の窓は三六〇度空気が廻るように大小の長方形の格子窓が作られ、形は縦長や横長の格子がうまく組合わされ、木殿の周囲にはめ込まれ入れられている。内からもう一重窓はあるものの、普段は空気が通るよう、晴雨にかかわらず格子のままの状態であるとのことだ。

そして、版木の四角の角は金具の被覆が直角に附けられ、丸鋸で正三角形に三個所留められている。王妃の寄附により、版木を守る被覆と丸鋸が保護のため附けられたのである。立てられた版木の下部には紙で図書記号が附されている。

高麗の高宗が蒙古軍撤退を祈願し復刻させたものといわれ、高麗大藏経版木は八一二五八枚とのこと、八万大藏経と呼称される所以である。版木は大部ゆえ調達に腐心し、楠、白樺とも、また山桜との答も得る。版木の大きさも縦二四糎、横七〇糎、厚み四糎あるいは、縦二三・九糎、横六九・五糎とも記される。並ぶ中から一枚の版木を取り出してわたくしが測つたものは縦二五糎、横七八糎、厚み二糎であった。大藏経は仏経の經典すなわち経、律、論すべてを称え、仏教の話を集大成したものである。

孟東燮先生に窺うとデジタル化はすべて終了しており、今後の研究に期待することである。次世代への継承と期待をもって躊躇いなく学問を進捗させる機運は逞しい勢いを感じさせるものである。

沈思しつつも実践への活力を語りかける国宝かつ世界文化遺産の大部分版木および木殿であった。

グローバル化により世界情報が一瞬にして入手し得る反面、情報の渦に自己を忘却し兼ねない世になった。ひと時ひと時を潜ってきた歴史、その一つが版木であった。静かにそつとその佇まいや息づきを感じる時こそが至福の時間である。しまつておいた一文を敢えて、己の静寂と己を見失わ

ぬ糧を版木や収納した大蔵経木殿が語りかけてくれる。静かに版木と向き合う時、国宝、世界遺産という仰々しい肩書の蔭に真の本質を再考させる偉大な力が秘められている。静かな感激をここに記す。

三

書籍は紙の時代から電子書籍の時代に入るといわれる。Digital化しPaperless時代の到来といわれる所以である。二〇一〇年春季、アメリカのアップル社は「Pad」という名称の、pcを小型化した液晶画面でタッチパネル式の情報端末機を開発し出した。新商品はヒットとなり、新聞、書籍など情報として取込み、配信するというものである。情報通信事業の新たな柱の一つに育てる考えである。我国大手企業が同様のアイデアを使用し日本市場の席捲を狙っている。電気会社が端末を使用し電子書籍の制作支援や配信を組合わせ事業にして行くという。各新聞社、印刷業界、通信の企業と提携により進めていく話が練られている。携帯電話機の各種機能が拡充され、pcに近い機能を手軽に持運び可能とする新基軸の二十一世紀のアイデア機器といえる。

本屋業界のみならず、学校デジタル化ということでは、教科書のデジタルや、電子黒板などが課題として話題となっている。デジタル化で変化する教室を既に予感させる。欧米を始め我国でも新聞を購読しない家庭や人々が増加している現実がある。大半、タッチパネルを指先でなぞる時が到来しそうな予感である。

これに対して、天野祐吉はニュースを知るのではなく「識る」ようになるという、新聞は「深聞」になる、すなわち想像力の原っぱを深い好奇心から開ける扉のようなものにする時には、新聞はなくなならない、と記す(朝日新聞朝刊二〇一〇年八月「CM 天気図」)。「深聞」で人と人が気持ちよく繋がれる世であって欲しいと願う。

逡巡を求めるわたくしは、時に情報を入手し得る道具として使用するつもりである。同時に、身体を、足を、手を使って資料を見、蒐集し、考える時には紙と筆記具が最適であると考えている。MIT(マサチューセッツ工

科大学)メディアラボ教授の石井裕(一九五六生)はアラン・ケイ(一九四〇アメリカ生、パソコンの父、多賞受賞。日本関連では京都賞。京大名誉博士号二〇〇九年に授与)の「未来を予言するベストの方法は、自らが未来を作り出すこと(The best way to predict the future is to invest it.)」(パロアルト研究所、一九七一年)を実践する人物である。石井は模造紙とマジックインキを使用し考え書きアイデアを重ねて行く。pcは人間が作ったものゆえ、それを越えるには紙と筆記具を使い考える、と。

話は世界遺産の大蔵経の版木から最先端情報機器に飛んだ。消滅するものの底流に在る普遍が教えてくれるもの、それは人間に考える力と勇気を与えてくれるものである。わたくしは文学の研究に携わる人間として、文字に言霊を考える。一字一字に込めた意味の力を信じたい。

文字は逡巡して琴線に響かせるものと思う。

World Heritage “Haeinsa Temple Janggyeong Panjeon,
the Depositories for the Tripitaka Koreana Woodblocks ” and the soul of language
Masako HARA

Key words

The engraving 80000blocks, The Korai’ s emperor Koso, Information equipment,
the soul of language